



PEACEBOAT PEACE おりづるプロジェクト

ヒバクシャ地球一周 証言の航海
Global Voyage for a Nuclear-Free World
PeaceBoat Hibakusha Project

ピースボート
〒169-0075
東京都新宿区高田馬場 3-13-1-B1
TEL03-3363-7561 FAX03-3363-7562

2011.11.16

参加被爆者略歴



喜多村 隆昭(きたむら たかあき)

長崎被爆 1929 . 1 . 3生まれ 被爆当時16歳

長崎県長崎市在住

原爆投下翌日、救護隊として長崎市に入市し被爆。救護活動中、原爆被害の惨劇を目の当たりにする。救護活動が終了し数年後、歯茎からの出血など原爆の影響と思われる症状が半年ほど続いた。戦後は長崎大学および大学付属病院に文部事務官として勤務。これまで舌癌や上顎癌などを煩い、手術を受けた。



李 鐘根(り しょうこん)

広島被爆 1929 . 8 . 15生まれ 被爆当時16歳

広島県広島市在住

在日韓国人二世。父親は日韓併合により、日本に強制連行された。日本での生活ができるようになったところで、母親を呼び寄せ、後に自身が生まれる。被爆当時、自身は日本国有鉄道に勤務しており、通勤途中で被爆。両親は入市被爆し、長く病床につく。



原口 貞夫(はらぐち さだお)

長崎被爆 1931 . 6 . 25生まれ 被爆当時14歳

長崎県長崎市在住

爆心地から約3 km 離れた自宅付近で被爆。戦前から軍国教育を受けてきたが、終戦後その教育が誤ったものであったと気づき、教育の大切さと恐ろしさを学んだ。その後英語教師として38年間私立高校に勤務。生徒たちには自己紹介とともに必ず被爆体験を語り続けてきた。その生徒数は5000名以上にも及ぶ。



松長 静子(まつなが しずこ)

広島被爆 1932 . 1 . 1生まれ 被爆当時13歳

広島県広島市在住

被爆当時女学校2年生。建物疎開作業中に被爆。熱線により顔や首などに火傷を負う。同居していた祖母は爆風により倒れたタンスの下敷きになりその約1ヶ月後に他界。自身は放射能の影響と思われる急性症状に冒され、半年間病床についたが奇跡的に回復。たくさんの亡くなった同級生のためにもと、1985年より被爆証言活動を開始。



中村 博(なかむら ひろし)

広島被爆 1932 . 1 . 5生まれ 被爆当時13歳

広島県府中市在住

戦時中 は学徒動員として日本国有鉄道に勤務。爆心地から1 . 8 km 地点にあった寮内にて被爆。大きな外傷を負わなかったため、ほかの被爆者の救護活動に従事。また、原爆で亡くなった方々の遺体収容作業にも携わる。被爆一ヶ月後より歯茎からの出血や脱毛が始まり、その後も白血球減少などにより入退院を繰り返す。広島県府中市原爆被害者の会会長。



山田 一美(やまだ かずみ)

長崎被爆 1933 . 8 . 3生まれ 被爆当時12歳

長崎県長崎市在住

父親の仕事のため中国東北部で生まれるが、小学生のころ長崎にある祖母方に住むため帰国。爆心地から2.3 km 地点にて被爆。退職を機に証言活動を開始。被害者意識の強調だけでなく、日本が行った加害の歴史もふまえて対話の重要性、戦争のない社会の構築を訴える。長崎平和推進協会継平和案内人及び継承部に所属。



増川 雅一(ますかわ まさかず)

長崎被爆 1941 . 4 . 2生まれ 被爆当時4歳

長崎県長崎市在住

爆心地から約3.5 km 地点で被爆。祖父と父親は爆心地付近で被爆、遺体は見つかっていない。原爆との因果関係は不明だが、37歳のとき硬膜内髄外腫瘍を煩う。長崎放送(株)に勤務し、被爆証言の番組制作などに尽力。現在は、人間や自然の素晴らしさを切り口に平和を語り継ぐことをテーマにした「ナガサキピースミュージアム」専務理事に就任、活動を続けている。



永島 三歳(ながしま みとし)

広島被爆 1941 . 4 . 13生まれ 被爆当時4歳

大分県臼杵市在住

爆心地より2 km 地点にて左後方より被爆し、左手と両足後方に熱傷を追う。現在もその痕跡が残る。父親はすでに中国で戦死しており、母親と祖父母は被爆したが、幸いにも大きな健康被害は受けることがなかった。大分県原爆被害者団体協議会監査役兼、大分県被爆者団体臼杵市支部長。



石川 律子(いしかわ りつこ)

広島被爆 1944 . 1 . 15生まれ 被爆当時1歳

広島県広島市在住

三姉妹の次女として生まれる。原爆により爆心地付近の国民学校に勤務していた父親と同居していた叔母の二人が行方不明となる。その7年後に母親が病死。そのため三姉妹は祖母によって育てられる。小学校教員として教育現場にて平和教育に尽力。



小川 忠義(おがわ ただよし)

長崎被爆 1944 . 3 . 22生まれ 被爆当時1歳

長崎県長崎市在住

原爆投下当日は疎開していたが、1週間後自宅の状況確認のため入市し、被爆。自身の被爆当時の記憶はないが、被爆者の最後世代として証言を継承していけるようにと今回の航海に参加。また、現在は自身の趣味である写真を生かし、毎年8月9日11時2分の長崎市内の様子を写真に収める活動を行っている。